京大 森里海ラボ

KYOTO UNIVERSITY MORISATO UMI LABO

by ONLINE

2020

みんなでちょっと幸せになれる
持続可能な未来を作るために

ビジュアルブック

目次　CONTENTS

p01　森里海連環学とは？

p02　森里海ラボ by ONLINE 当日のタイムテーブル

p04　基調講演１　講師　吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター前センター長・京都芸術大学副学長）

基調講演２　中田　公明（Panasonic マニュファクチャリングソリューションセンター）

p06　これまでの森里海ラボの活動

p08　参加高校紹介

p10　グループワークレポート

p22　グラフィックレコーディングまとめ

p24　こっそり裏側！ FA さんのアフタートーク座談会

p28　参加してどうだった？アンケート

p30　さいごに

森里海連環学とは?

日本は海に囲まれた森の国です。そのような特色を持つ日本では、森から海までの健全な生態系のつながりが、川や海における生物生産はもちろんのこと、地域の振興や人々の安全で安心な暮らしにとっても極めて重要です。
このような観点から、フィールド研では健全な生態系連環の再生に焦点を当てた「森里海連環学」を提唱してきました。森里海連環学は、自然の仕組みと人間活動とのつながりの重要性を調べ、人類の持続可能な幸せのために何をすべきかを研究し社会で実践する、自然科学と社会科学の多様な分野を統合した学問領域です。

フィールド科学教育研究センターとは?

京都大学の研究林、水産実験所、臨海実験所などを統合して 2003 年に設立され、森の施設 4 カ所、里の施設 4 カ所、海の施設 2 か所のあわせて 10 のフィールド施設を運営しています。フィールド研では、「森里海連環学」を提唱し、森・里・海で集めた多様なデータから森や里が海に与える影響を科学的に明らかにし、地域の方々とともに森里海連環学に基づいた地域づくりを行っています。

森里海連環学教育研究ユニットとは?

森里海連環学の趣旨に賛同いただいた公益財団法人日本財団から助成を受け、日本財団との共同事業として2012年に京都大学学際融合教育研究推進センターに森里海連環学教育ユニットを発足させました。さらに 2018 年度からそれを発展させた森里海連環学教育研究ユニットを立ち上げ、森里海の連環機構の解明とそれを基盤とした地域振興への展開を研究しています。

森里海ラボ by ONLINE TIMETABLE

9:00 アクセス開始

9:30 開会あいさつ・趣旨説明

9:45 各高校の紹介

11:15 基調講演１　**森里海を見つめる目　こころが動く価値に気づく**
講師　吉川　左紀子
京都大学こころの未来研究センター前センター長
京都芸術大学副学長

基調講演２　**“里”にある“会社”**
講師　中田　公明
Panasonic マニュファクチャリングソリューションセンター

12:00 昼食休憩

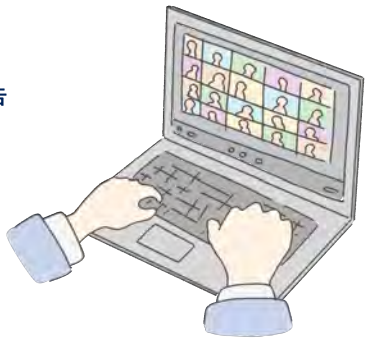
13:00 グループワーク

15:00 グループワーク　まとめ

16:00 全体討論　グループ報告

17:45 講評・記念写真

18:00 終了



と海のつながり
G5 七尾高校...
G2ありちゃん(西条)
G2 宮崎 瑛(伝...
G6すずな
G5中須咲那
長岡留子@京都...
福岡県立京都高...
津和野高校
伝習館高校一般...
高瀬
ブランド化のアピール、地域だけでなく、他県県から人を集めたり、観光につなげる取り組み。
地域資源をいかす
テーマ：私の残したい風景
人と自然を結ぶ絆
地域心理学

基調講演

01

吉川左紀子

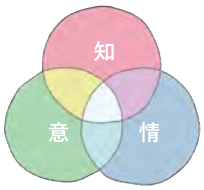
京都大学こころの未来
研究センター前センター長
京都芸術大学副学長

森里海を見つめる目
こころが動く・価値に気づく

なぜ心理学？

人の心を理解するというのはどういうことなのか、人と会話をするだけで心が軽くなったり変化が起こったりするのはなぜなのか、そんなことに関心をもって研究をしてきました。心理学者です、と自己紹介すると、心が読めるんじゃないですか?と言われることもよくありますが、よくわからないからいろいろなアプローチで心について研究しているのが心理学者です。今日は、心理学はこんな学問です、心理学を学ぶとこんなことが分かります、という例をお話しします。

1. 心のはたらきの３つの区分



知 考える、記憶する、知識を得る、など
情 嬉しい、悲しい、ワクワクする、など
意 何かをやってみよう、という意欲

心の働きは「知」「情」「意」という3つに分けて考えることができます。この3つが連動して生み出されるのが心です。この区分は 18 世紀の哲学者カントが提唱したと言われており、心の働きを考えるときの枠組みになります。

2. 心には沢山の「思い込み」がある

たとえば「何度も見ているものは良く知っている」という思い込みがあります。でも百円玉の図柄など、正確に思い出せる人は意外に少ないんですよ。自分の心は自分が一番よく分かっている、というのも思い込みの一例です。

3. 心をつなぐ仕組み

それではなぜ私たちは、人の心を理解したり共感したりできるのでしょうか。90 年代以後の脳科学の研究から、人の脳には、他者が行う行動を自分の行動になぞらえて理解する仕組みが備わっていることが分かってきました。

森里海について考える　鍵となるのは人

自然環境を変えるのは、その中で暮らしている人たちであり、人の心、です。台風や洪水などの自然災害にみまわれたとき、多くの人たちの心に動くのは「知」「情」「意」のすべてです。「知（過去の記録や現場の状況を客観的に分析する。）」「情（自然のダメージに悲しみや落胆、怒りの気持ちを抱く）」「意（何としてももとの状態に戻したい、という意志をもつ）」といった心の働きですね。たくさんの人たちの、こうした心の働きを総動員して、自然環境の復元、保全の対策をたて、行動に移す。こうした心のパワーは、皆さんが取り組んでいる SDGsにもつながっています。

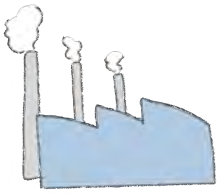
京大フィールド研が中心になって進めている森里海連環学は、森と人、里と人、海と人、といったように、人の心と行動を組み合わせて考えることが大切だと思っています。よりよい自然環境の維持は、まず人が自然のことを「知」と「情」で理解し、感じ取り、その価値に気づいて「意」を発動することから始まります。「森に暮らして、海を思い、海に暮らして、森を思う」が森里海連環学の大事なフレーズです。ここに、「里に暮らして森を思い、里に暮らして海を思う」の一文を入れ、次の中田さんのお話しにつなげたいと思います。

“里” にある “会社”

基調講演
02

中田公明

Panasonic
マニュファクチャリング
ソリューションセンター



工場や会社は里の中にある

なぜこのシンポジウムに会社の製造業をやっている人が来たのかというと、タイトルの森里海の「里」という概念に対して、工場や会社と呼んでいるものは里の中にあり、森と海とつながっているその途中にあるという認識を持っているからです。私たちは環境に対してうまくつながっていく必要があると思っています。

CO_2 の排出も意識する

工場では必ず、材料、空気、水を使わないと製造はできません。今一番大きなエネルギーは電気です。他にもガス、重油を炊いたりすることで、電気が入り製品ができています。製品だけができれば良いのですが実際には製品にならなかった材料が出ています。なので工場を運営するときには CO_2 の排出を意識しています。私たちはこの CO_2 を発電所が作っているから気にしなくてもいいと思っていません。使っている電気も CO_2 としてカウントし、この工場ではこんなに CO_2 を発生させているという考えを持ちながら商品を作っています。

資源循環のループが重要

できるだけ自然から新しい材料やエネルギーを得ず、もう一度使って新しい商品にして出す流れを作っていくのがとても重要だと言われています。サーキュラーエコノミーという言葉の一つ、資源循環としてはこのようなループをいかに作るのかが重要になってきます。
プラスチックが海洋に流れないようにコンポスタブルな土壌に返すことや、自然というかたちに返すというループを作っていくことが大事だと思っています。

非常に牧歌的な一般的に言われている里のイメージだけではなく、生活や社会活動も里としてきっちり定義に入れて、全体の関連の中で、みんなでよくしていく必要があるという認識を持つことが重要。

世代を超えてたくさんの話をしよう

繋がりによって得られるものを「知識」「体験」「体感」と書きました。そして「共感」をして次の行動に移ってもいいと思っています。
世代を超えていろんな話をするのが大事です。これからの未来を作っていこうと思ったらみんなでどんどん話をしていくのが良いと思います。おそらく地方の残したい風景はどんどん消え去らざるを得ない。残したいけど残せない。これを考えると、学生が「私の残したい風景」として上げてくれている写真は、人がちゃんと手を入れているからこそ残っていると思います。公害や自然を破壊するのはだめだと思うが、人起点で言うと「残したい風景」というモノのが残っていくというのは、必ずしも自然が残るという単純な話とは違う世界でしょう。コロナの影響で地方に分散しているということもありますが、いろんなところが人で溢れて、自然があって、昔みたいな公害みたいな話にならずに残っていく、そんな世界がこの先にできていったら良いと思っています。

これまでの

森里海ラボの活動

シンポジウム Symposium

第１回　森里海シンポジウム

人と自然のきずな
～森里海連環学へのいざない～

2013.6.29

第２回　森里海国際シンポジウム

Integrated Ecosystem Management
from Hill to Ocean

2013.11.26

第３回　森里海シンポジウム

「人と自然のつながり」を育てる地域の力
－淡海（おうみ）発・企業の挑戦－

2014.12.14

イベント Event

国際ワークショップ

2017.10.27–28

京大 森里海ラボ in 芦生

2019.7.27–28　　トレーラー動画

ポスターセッション審査会

2020.3.23

第 4 回　森里海国際シンポジウム

森里海連環を担う人材育成の成果と展望

2017.10.28

第5回　京都大学・日本財団森里海シンポジウム

足元から見直す、持続可能な暮らし
～森里海連環学をレジリエンスで紐解く～

2019.2.16

COMING SOON!!

第6回　京都大学・日本財団森里海シンポジウム

高校生と考える未来の風景
ー守りたいもの・変えたいものー

2021.3.13

NEW!!

京大 森里海ラボ by ONLINE

2020.10.31

COMING SOON!!

京大 森里海ポスターセッション by ONLINE

2021.3.13

京大 森里海ラボ
by ONLINE 2020

参加高校

Participating schools

1 福岡県立京都（みやこ）高等学校

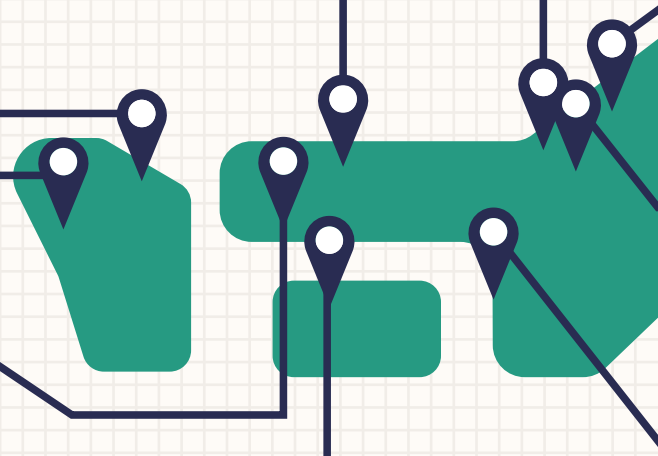
2 福岡県立伝習館高等学校

3 山口県立徳山高等学校

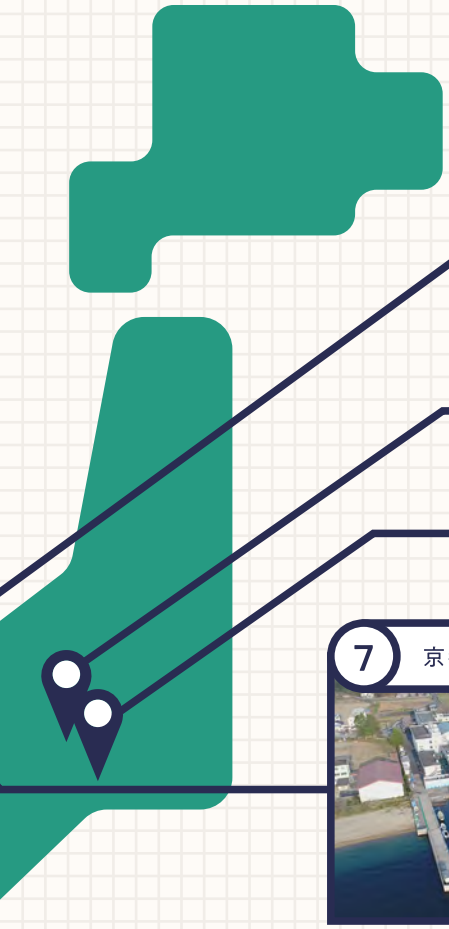
4 愛媛県立西条高等学校

5 京都府立西舞鶴高等学校

6 島根県立津和野高等学校



全国 11 の高校から総勢 31 名の
高校生たちが集まってくれました。



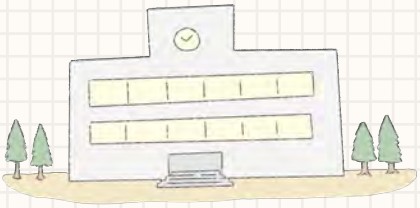
9 石川県立七尾高等学校

10 東京都立八王子東高等学校

7 京都府立海洋高等学校

11 神奈川県立生田高等学校

8 和歌山県立海南高等学校



GROUP 1 REPORT

多様性を知る

みなさんが思い描く「残したい風景」には、どのような要素が含まれているでしょうか。海、山、川、町、人、自然、伝統文化、産業など。私たちの世界には多様な風景があり、風景の中にも多様な要素が含まれています。
それらの輪郭を丁寧に見直す作業を通じて、風景を残すということを一緒に考えていきました。

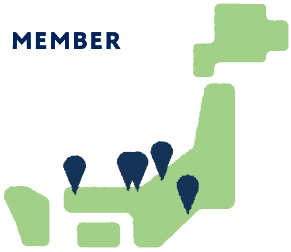
FACILITATOR

特定助教
生態学・里山再生学
赤石大輔

TEACHING ASSISTANT

京都大学農学部
森林科学科１回生
佐山葉

MEMBER



京都府立
海洋高等学校
高瀬くん

京都府立
西舞鶴高等学校
田中くん

神奈川県立
生田高等学校
ユウキくん

島根県立
津和野高等学校
佐藤くん

石川県立
七尾高等学校
もりしゅん

グラフィックレコーディング

GRAPHIC RECORDING

こちらの絵は、グループワークの報告（7分）をその場で描いたものです。

素晴らしい資源を活かすも殺すも人間次第

グループ1では、それぞれが持ってきた残したい風景を紹介したあと、メンバーの地域の要素を森、里、海、人工物、自然、文化、伝統、知恵に分けて要素をまとめていきました。

住んでいる地域を比べてみると …

太平洋側の人や日本海側の人もいれば、山に囲まれている人、冬に雪が降る人、雨が降ると大きな災害になってしまう人など、多様性を持った様々な、気候、文化のメンバーが集まっていました。それぞれ住んでいる地域を比べると、日本海側と太平洋側に広くばらけており、地域ごとに文化や気候が大きく変わるということに気がついたようです。

主に海洋高校や西舞鶴高校、七尾高校など日本海側に面した学校から海に関する人工物や自然、文化が多く出てきました。

その地域ならではのものに盛り上がる

残したい風景として持ってきた、海洋高校の横にある漁港の写真から漁業の話が広がりました。ここでは養殖業も盛んであり、漁業だけではなくブランド化によるアピールや新鮮な魚を使った料理など魚の利用の面でも発達していました。他にも、普段は立ち入り禁止の冠島という島に生息するオオミズナギドリの話や、甘海老やキスなどの海産物のお話も話題に上がりました。海に関する話が多い一方でころ柿という干し柿の一種も話題に上がり、その地域ならではの特産物に胸を踊らせながら話が進んでいきました。

それぞれの場面で適切な関わり方を

人が暮らす場所には地域によって様々な文化や伝統があり、それらは人間との関わりによって成立しています。一方、海でバーベキューすることで出るゴミや、産業の発展によって自然を損なわせている例も少なくありません。他にも耕作放棄途中で農業をやめてしまって田畑が荒れるという例もありました。自然と人の関わりはバランスを取ることが難しく、素晴らしい資源を活かすも殺すも人間次第だという意見から、自然と関わる様々な場面においてそれぞれの適切な関わり方を考えていくべきだという結論にまとまりました。

GROUP 2 REPORT

人と自然を結いなおす

人は自然（生態系）の一部ですが、人工的なものに囲まれた生活の中で自然を意識する機会はそう多くありません。様々な環境問題は、そうした「自然と切り離された生活のあり方」と深く関わっているように思います。残したい風景の中に、人と自然を結いなおすヒントがきっとあるはず。高校生の皆さんには、残したい風景を深堀することを通して、自身が考え続けたい「問い」を立ててもらえたらと思いました。

FACILITATOR

京都大学野生動物研究センター特定助教
福島誠子

TEACHING ASSISTANT

農学部資源生物科学科1回生
山本玲

MEMBER

山口県立
徳山高等学校
中泉くん

愛媛県立
西条高等学校
ありちゃん

神奈川県立
生田高等学校
はるちゃん

島根県立
津和野高等学校
鯉渕くん

福岡県立
伝習館高等学校
宮﨑くん

グラフィックレコーディング

GRAPHIC RECORDING

こちらの絵は、グループワークの報告（7分）をその場で描いたものです。

利害の対立 不理解を理解する

グループ2の発表では、「人と自然を結いなおす」というテーマから、「残したい風景」の本質（自分たちが本当に守りたいのは何か）に焦点を当ててディスカッションを進めました。
人の想いが鍵になるということに気づき、それぞれの意見から共通点として見えてきたのが利害の対立でした。

利害の対立を深堀する

人を呼び込むためには開発が必要だという A さんの意見と、生態系を守りたいから開発は反対だという B さんの意見があったとします。そこからどうやって対話し、お互いに納得できる着地点を見つけられるでしょうか。一方的にどちらかが妥協するのではなく、お互いに Win-Win となるアイデアを出せればよいですが、利害や損得が絡む対立はそれも難しいように思われます。

では、そもそも何が利益で何が不利益なのか。立場や生きてきた環境によって違いそうです。対立の難しさは、お互いがその主張をするに至った背景を知らないこと（=不理解）にあるのではということに気づき、不理解を理解するための教育が必要だということになりました。そして、そうした教育や対立の解決には、両方の主張にバランスよく耳を傾ける第三者の視点も必要だという意見も出されました。

人の考えが変われば社会も変わることができます。最終的に、自分はどうあるべきか?という考えに至ったようでした。

100 年後にあの時あの決断を下してよかったねと言えるように

「環境を守るということは複雑で簡単ではない。だから自分は、もっと周りのこと、他の地域のことを知っていきたい」といった感想がきかれました。100 年後、あの時あの決断でよかったねと言える今にしていくことが大切だという気づきもありました。自分たちができることとして、対立の根底にある不理解を認識し、それを乗り越えていく教育や、対立に陥らない解決方法を模索していきたいという結論に至りました。

GROUP 3 REPORT

地域資源をいかす

みなさんの暮らす街はどんなところですか?
「森里海の連環」や「地球環境問題」は広範に渡る課題で、なんとなく頭では分かっているつもりでも、身近な生活の中では感じにくいかもしれません。自分にとっては当たり前の景色が、実は当たり前ではないかも…。出身地の異なるみんなでお互いの街を紹介し合いながら、自分の地域の課題や資源を見つめなおしてみました。

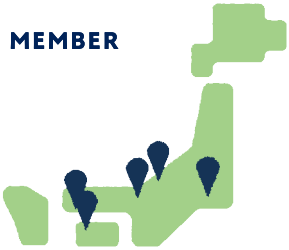
FACILITATOR

京都大学地球環境学堂
研究員
時任美乃理

TEACHING ASSISTANT

農学部森林科学科
1回生
佐藤薫

MEMBER



山口県立
徳山高等学校
ひかさん

石川県立
七尾高等学校
こまちさん

愛媛県立
西条高等学校
あいさん

京都府立
海洋高等学校
はわさん

東京都立
八王子東高等学校
岩﨑さん

グラフィックレコーディング

GRAPHIC RECORDING

こちらの絵は、グループワークの報告（7分）をその場で描いたものです。

人と自然のつながりをどう回復していくか

グループ３では、それぞれが持ち寄った「残したい風景」をもとに、そこにある自然と、そこに生きる人がいまどんな様子にあるのか、地域の姿を紹介し合いました。残したい風景には、緑豊かな田園風景や、せせらぎが聞こえてきそうな川の自然の風景、京都の観光地の滝の写真など、それぞれの地域の様々な美しい景色がありました。

自然体験や農業体験から繋がる

そんな美しい景色ですが、それぞれ問題を抱えていました。交通の便が悪く若い人が都会のほうに出て行ってしまうことで子どもが減少し、人と人とのつながりが希薄になっていたり、田畑がコンクリートになって自然が減少するなどの問題がありました。人と自然のつながりを回復するためには何ができるのか…。

グループ3のメンバーは、自分たちの経験から、自然体験や農業体験が地域や自然とのつながりを生んでいることに気がつきました。そこから他の地域の人に興味を持ってもらい、どうやったら里山に人を呼ぶことができるのかを考えていきました。

まずは地元の人たちが自分たちの地域の良さを知って意識する必要がある!ということで、原動力になるキーパーソンはいないだろうか?という意見が出ました。地域の活動を紹介することや、SNSを使った情報発信をすることで、外部の人が地元の良さに気づくきっかけになるのではないかというアイディアです。そこからアピールのできる行事や自然体験を行うことで人と人とのつながりが生まれ、そのサイクルがまわり続けることによって、人と自然のつながりも回復できるのではないかという結論にたどり着きました。

身近な地域資源を活かす

一つひとつの問題は複雑に絡み合っていて、問題一つを解決させることすら簡単ではないと改めて気づかされたようでした。「人と自然のつながりを回復させる」ために、外部の人にもっと地元へ来てほしい。でもそのためにはまず、自分の身近なところにあるものが「資源」だと気がつくことが大切。「資源」の存在に気づくためにも、外部の人に「資源」を知ってもらうためにも、人と人が関わり合うきっかけづくりが必要かもしれない。そしてそのきっかけをつくるのは、もしかしたら自分かも!? 他人事のように語っていた問題が自分事になった瞬間が垣間見えました。

GROUP 4 REPORT

地域心理学

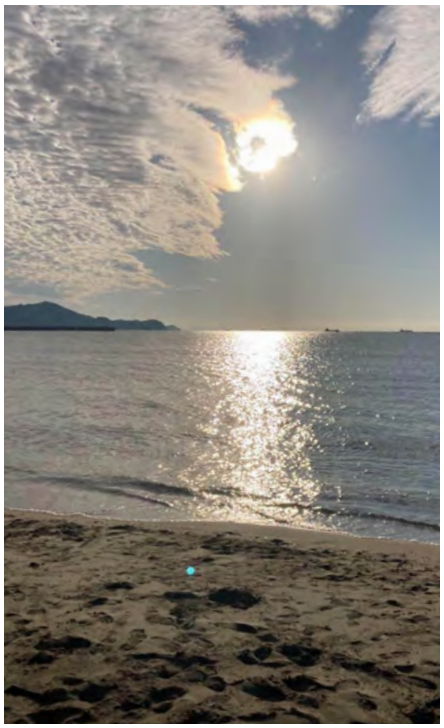
グループ 4 は『地域心理学の目線から “残したい風景” を考えてみよう!』をテーマに掲げました。地域への愛着（地元愛）？地域へのアイデンティティ?などなど、私たちは住んでいる地域に対して何を感じているのでしょうか。そんな素朴ですが、日常では深く考えることもない部分を切り口に「私の残したい風景」を議論しました。

FACILITATOR

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター研究員
法理樹里

TEACHING ASSISTANT

農学部森林科学科 3 回生
上田奈央



MEMBER

和歌山県立
海南高等学校
まなとくん

京都府立
西舞鶴高等学校
深井くん

神奈川県立
生田高等学校
しゅんくん

島根県立
津和野高等学校
村上くん

京都府立
海洋高等学校
秀島くん

グラフィックレコーディング

GRAPHIC RECORDING

こちらの絵は、グループワークの
報告（7 分）をその場で描いたものです。

持ち寄った写真から抽出した 5 つの共通点

グループ4では、みんなでちょっと幸せになるために未来にどんな風景を残していったらいいのか、という話し合いの要因になるものがどうやったら抽出できるかという方法について、FA さんの法理先生曰くごりごりにぶつかり合いながら議論したそうです。

1. 周りの風景

畏怖や幻想的など写真を見たときの
思いが現れているという言葉から

2. 自然

森や植物緑など、自然関連の言葉が
多く集まっていることから

3. 様々な運動に利用されている

散歩や縄跳びなど海や森の場所を
それぞれ生かし運動に活用されていたことから

4. プラス思考

景色を見ることで「綺麗」と思ったり
ワクワクしたりテンションが上がったり
するという前向きな言葉から

5. 心が安らぐ

心の安らぎが大切になっていることから

個人の思いを広げて集団としてまとめる

みんなが地元で撮ってきた「残したい風景」の写真を並べ、その写真に対して “思ったこと”・“感じたこと” を付箋に書いて貼っていきました。一見すると最初はバラバラな個人の意見があふれていました・・・。でもそこから似たものを集めて、少しずつグループ 4 としての意見を収束させていきました。結果 5 つの要素にまとめることができました。

これからの話し合いの起点になるもの

地域のみんなと「残したい風景」を話し合う際に、この5つの要素を起点にして考えることで、「みんなでちょっと幸せになれる未来」を描けるのかもしれない?そんな思考体験をグループ 4 では実施しました。

GROUP 5 REPORT

ひとをつなぐ

どんな人びとが関わっているか?、自分自身も含めて、関わる人びとのそれぞれの想いはどんなものかを想像することで、どのようにつないでいったらよいかをイメージします。そして、自分の想いの伝え方や、多様な人びとの想いの共有の仕方、実際に行動を起こしてもらうための道すじを議論しました。

FACILITATOR

神戸大学農学研究科
特命准教授
清水夏樹

TEACHING ASSISTANT

農学部森林科学科
3 回生
奥野真木保

MEMBER

和歌山県立
海南高等学校
さやかさん

東京都立
八王子東高等学校
しゅうとくん

京都府立
西舞鶴高等学校
さなさん

石川県立
七尾高等学校
濱ちゃん

山口県立
徳山高等学校
しょうきくん

福岡県立
伝習館高等学校
そうたくん

グラフィックレコーディング

GRAPHIC RECORDING

こちらの絵は、グループワークの
報告（7分）をその場で描いたものです。

人と人の 3つのつながり

グループ5では持続可能な社会を作るためにどうしたらいいのか、人びとのつながりに着目して考えていきました。それぞれが持ってきた残したい風景の写真から、その風景にはどんな人たちが関わっているのか、どうすればその人たちをつなぐことができるかというところから3つのつながりを抽出し、具体案を話していきました。

1. 伝統行事の企画とメディアをつなぐ

1つ目のつながりは、地域の伝統行事を企画する人と、その企画を伝えるメディアとのつながりについてです。長く伝統行事を残していくためには具体的な情報発信が必要だと気づき、地域における年代別に分けた具体的なアプローチ方法も考えていきました。

2. 漁業者と釣り人をつなぐ

2つ目は漁業者と釣り人のつながりです。ポイ捨てをする人がいたり、特定外来生物のリリースのルールを知らずに破ってしまう人がいます。それをやめさせるために釣り人と漁業がつながりを持つことができれば川を綺麗に保ち、自然環境を守れるのではないかということでした。説得力を出すために直接訴えかける方法や、漁業関係者やボランティアが協力して見回りを行うなどの具体的なアイデアも提案していきました。

3. 捨てる人と探査をする人をつなぐ

3つ目にペットやゴミを捨てる人と、川の探査をする人をつなぐということでした。生き物と触れ合う機会を作ることで、生物と人とのつながりを感じ、生き物の大切さを実感して欲しいと考えました。その体験を小さい頃に体験できるプログラムを作り、子どもに受けさせるという体で自然体験をさせたい親にむけて発信します。生き物と自分のつながりを感じてもらうことができれば、ポイ捨てをすることもなくなるだろうということでした。

GROUP 6 REPORT

わくわくの伝播

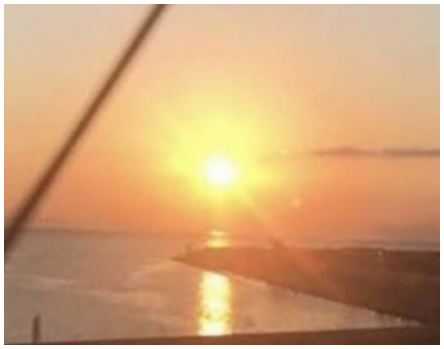
「残したい風景」を選んだ背景の、それぞれの想いや体験を共有し、共感や驚きを表現し合うことからスタートしました。他者との比較の中で共通性と独自性を認識していくという技を、今後多様性を尊重して物事を進めるために活用してもらえればと期待しています。将来の想像。守るための議論。その際、素直に考えを伝え、新しい視点を受け取る、そんなわくわくのキャッチボールを展開していきたいという想いでテーマを設定しました。

FACILITATOR

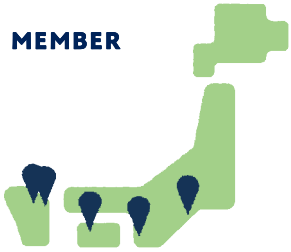
京都大学地球環境学舎
環境教育論 修士２年
武田裕希子

TEACHING ASSISTANT

農学研究科
森林科学専攻修士２年
井上悟



MEMBER



福岡県立
京都高等学校
はしもとくん

福岡県立
伝習館高等学校
ゆいさん

愛媛県立
西条高等学校
りささん

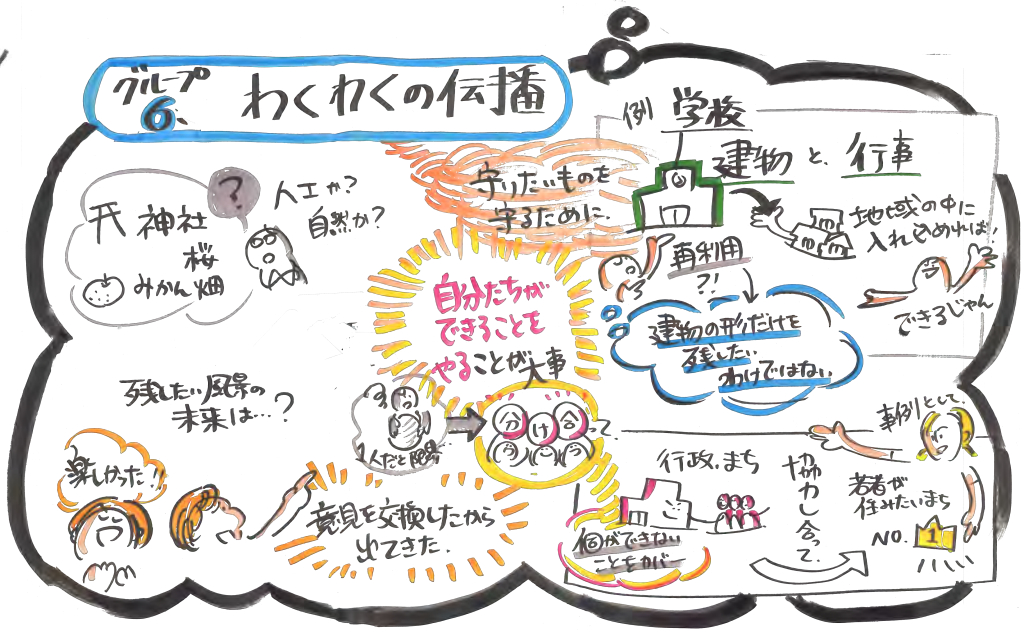
和歌山県立
海南高等学校
すずなさん

東京都立
八王子東高等学校
ひろかずくん

グラフィックレコーディング

GRAPHIC RECORDING

こちらの絵は、グループワークの
報告（7分）をその場で描いたものです。



自分たちでできることから一歩ずつ

発想を広げる

まずは残したい風景の写真を森里海で分け、それぞれ自然か人工のどちらに近いかを分けていきました。結果としては森（自然）里（人工）海（自然）が多いことに気づきました。また、森里海のそれぞれは川でつながっていることに気づきました。さらに、神社に祀られている自然物や街路樹の桜、畑のみかんなど、人の手が加わっている自然の存在に気づきました。

残したい風景の未来はどうなっている？

残したい風景の未来（50年後~60年後はどうなっている?）について話し合い、二つの起点で整理しました。

一つ目の起点は少子化と人口減少が起こることです。そこから海産業衰退や図書館・家などの人工物が減ることや、開発によってコンクリートやマンションが増えることにつながりそうだと考えました。しかし海産業が衰退すると魚が増え、自然にプラスになります。人工物は減りますがみかん畑は変わらないという意見も出ました。

二つ目の起点は地球温暖化です。地球温暖化によって台風が起こりやすくなり、その影響で自然物が壊されるという意見がありました。

なくなりそうだけどなくしたくないもの

少子化の影響で学校や家などの建物が無くなるのではないかという意見に対し、図書館やカフェなど別の施設として形を変えて残せるのではないか、加えて漁港や海も地元産業の一つであり、お寿司は日本文化なので、なくなって欲しくないと言う意見も出ました。

守りたいものを守るために

次に、守りたいものを守るためには何をすべきかについて、学校を例に話し合いました。学校をカフェや図書館などの場として活用するという意見について、学校というのは建物だけが残っていれば良いというわけではないと思うので、建物と学校行事の二つに分けて残していけるのではないかという意見が出ました。行事は学校以外の地域活動に取り組むことで、学校の子ども会など小さな組織でも残すことができます。建物は市や県が管理しているため行政機関の力が必要になります。実際に行政と協力している事例も共有されました。一方で、分けることによって私たちの力でも実現可能な部分が見えてきました。守りたいものを守るために自分たちでできることをする必要があります。できる範囲内のことから少しずつ活動してくことが大切だ、ということでまとまりました。

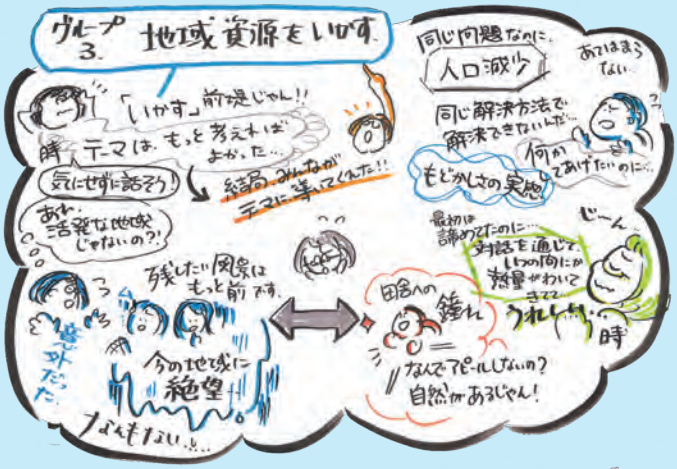
グループワーク

GRA RECO

アーカイブ動画は
こちらから

13:00–15:45 グループワークテーマ：私の残したい風景

PHIC RDING



森里海ラボ 2020 Online 2020-10.31

みんなでちょっと幸せになれる持続可能な未来をつくるために

グラフィックレコーディングとは?

会議やワークショップ、講演会などの場の内容を、イラストを中心に可視化をしていく議事録手法の一つ。リアルタイムに描き起こしていくので、その場にいる参加者に内容を共有することができ、議論や対話の創発に役立ちます。

裏側

FA さんたちによる

後日談

Symposium 2020/10/31 ▶ Later talk 2020/11/1

FA（ファシリテーター）とは会議における進行や事柄が円滑に進むように、参加者を導き、発言を促したりする存在のことです。そんな FA さんたちはどんなことを考えてグループワークを導いていたのか?
森里海 by ONLINE の裏側、その記録をグラフィックレコーディングに!

＼描いてきました！／

グラフィックファシリテーター
有賀優

グラフィックファシリテーターとして全国で活動中。大学の卒業研究で「グラフィックレコーディング」をテーマにしたことをきっかけに、現在は、地方創生での市民・行政の活動の支援や、IT 系企業のお手伝いをしている。

徳地直子
フィールド研
センター長・教授

GROUP1
FA 赤石大輔
フィールド研
特定助教

GROUP2
FA 福島誠子
京都大学野生
動物研究センター
特定助教

GROUP3
FA 時任美乃理
京都大学
地球環境学堂
研究員

GROUP4
FA 法理樹里
滋賀県琵琶湖
環境科学研究
センター研究員

GROUP5
FA 清水夏樹
神戸大学
農学研究科
特命准教授

GROUP6
FA 武田裕希子
京都大学地球環境学舎
環境教育論
修士２年

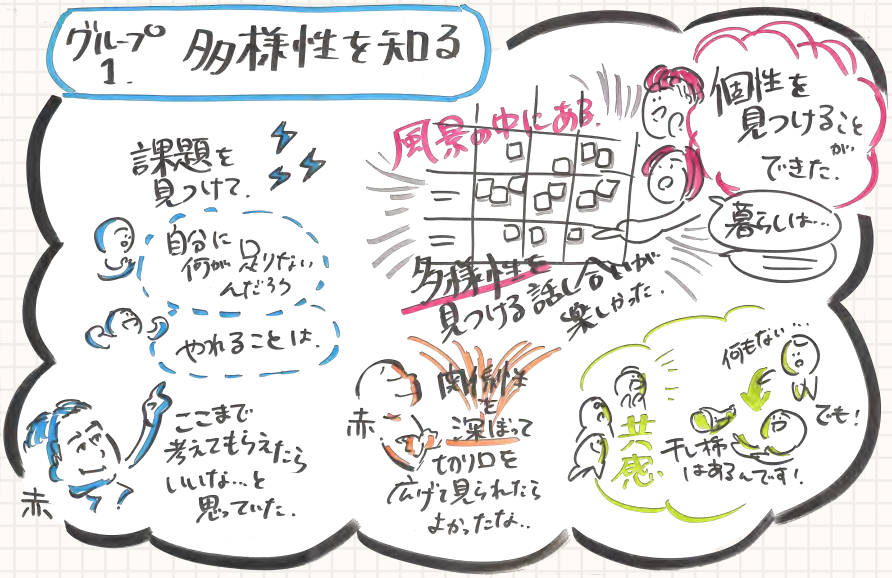
GROUP1

FA 赤石大輔

高校生がそれぞれに思う風景について意見交換し、風景から様々な要素が掘り出され、多様性マップが出来上がったのはとても良かったと思います。できればさらにそこから課題を抽出するところまで進めたかったです。

TA 佐山葉

オンラインでの議論になったが、グループの皆さんが活発に議論をしていて驚いた。自分の住む地域のことについて、詳しく話してくれたのが特に得難い経験になったと思う。日本にも様々な事情を持つ地域があり、それぞれ異なる特徴を持っていたが、逆に共通する事項についても見出すことができたのが面白かった。地域活性化や、ふるさとと呼べる地域をどのように守っていくかは、私たちにとって大切なことだと思う。それを再認識できた。



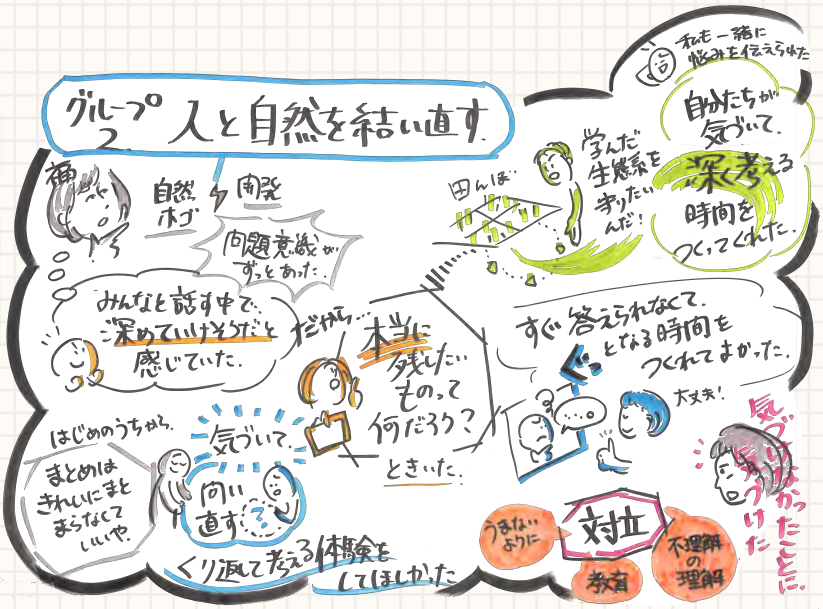
GROUP2

FA 福島誠子

残したい風景には、それぞれの原体験や価値観が隠れていて、それをみんなで掘り起こし共有する作業はとてもおもしろかった。社会にある様々な対立構造とその原因について考えることができ、私にとっても深い学びの機会となった。

TA 山本玲

今回のグループワークは高校生相手ということで、過去の自分と対話するような気持ちで臨んだ。しかし実際に始まると、彼らは自分の現在いる環境と環境問題をリンクさせて様々な切り口から考えていることを知った。自分の高校時代とは大違いであり、彼らの将来に期待する一方で自分への良い刺激にもなった。



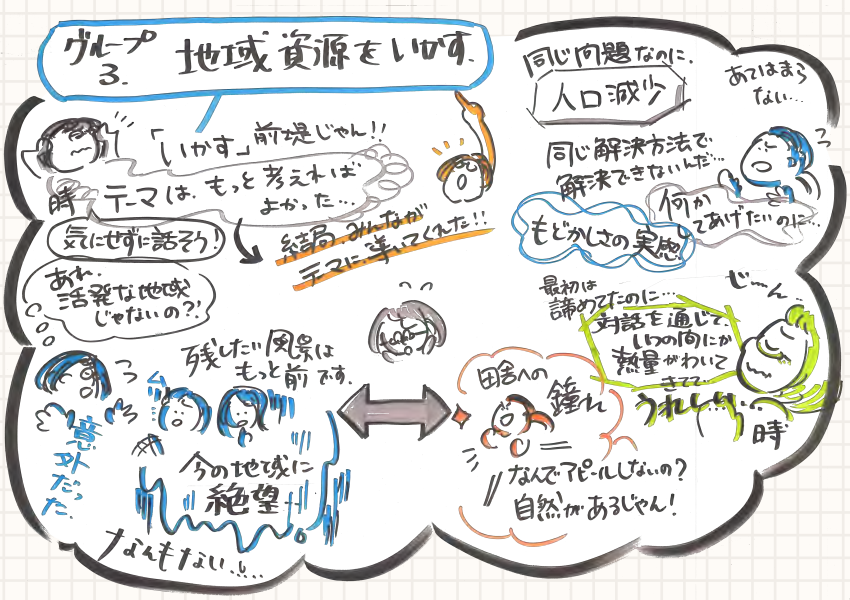
GROUP3

FA 時任美乃理

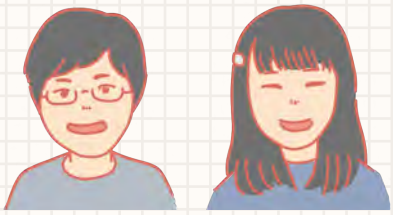
自分の暮らす地域に対してポジティブな意見の人もいれば、ネガティブな意見の人もいて、それぞれの言葉のトーンの違いが面白いディスカッションでした。自分とは違う意見や見方を持つ相手と向き合う中で、どこか外から眺めていた地域の問題を、最後には“自分の”地域、“自分事”として語り始めてくれたことがとても嬉しかったです。

TA 佐藤薫

高校生の皆さんは森里海ラボに参加する以前から地域のこと、自然環境のこと、それに関係する諸問題を学んで自分なりの意見を持っていたので、聞いていてとても面白かったです。それぞれの地域で解決の難しい問題に取り組もうとしている高校生がいるということを知って、高校生同士が互いに刺激を得られていたら嬉しいです。



GROUP4



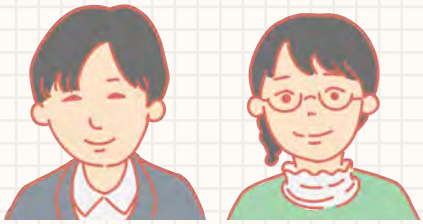
FA 法理樹里

遠くから眺めているだけでは、バラバラに見える意見も、要素間の繋がりを意識して比べていくと、あるまとまりが浮かび上がってきます。グループ 4 では、個人の意見を、グループ 4 の意見としてまとめていく“収束的思考”を実践しました。ワーク後は慣れない作業にみんなヘトヘトだったと思います。オンラインでしたが、とても濃い楽しい時間を共有できたと感じます。いかがでしたか?わたしはみなさんに 100 点満点 +α をお送りしたいです!

TA 上田奈央

オンラインということで、最初は私も高校生も少しぎこちない状態でした。しかし、マイクやチャットで積極的に意見交換していくと徐々に打ち解け、最終的にはやりがいのあるグループワークになりました。楽しい時間をありがとうございました。

GROUP5

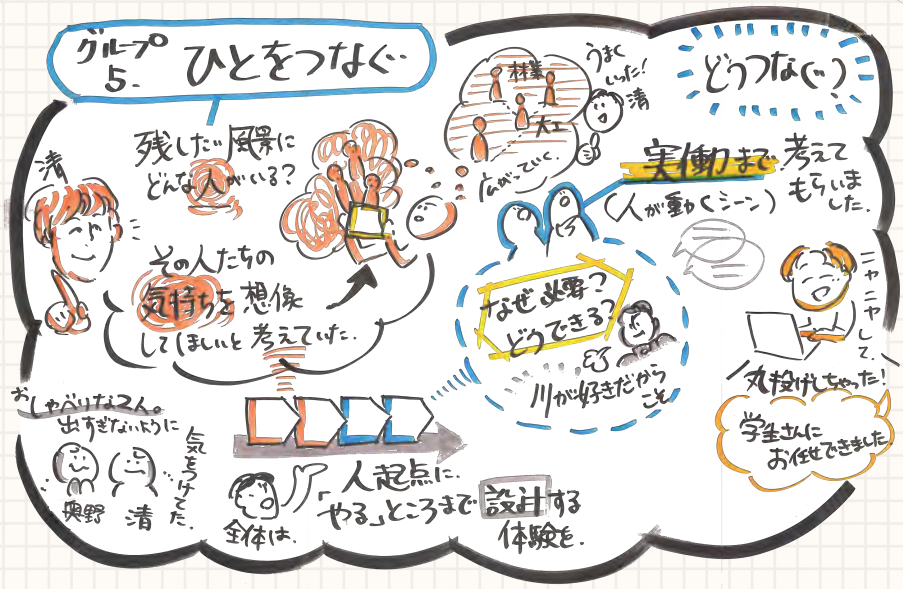


FA 清水夏樹

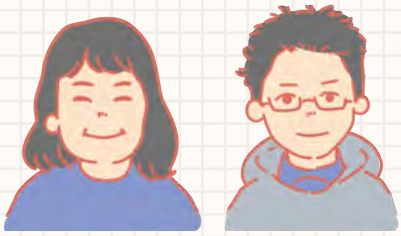
話がはずむまで少し時間がかかりましたが、徐々に「残したい風景」や体験に基づいた具体的な話が出てきました。つながりが実働するための仕組みづくり（受け身ではなく仕掛人になってほしい）という目論見がうまくいったように思います。

TA 奥野真木保

全国の高校生が話し合うからこそ共通点や多様さが実感でき、高校生らしい自由な発想がとても印象的なワークでした。「ひとをつなぐ」というテーマを通して、全国の高校生とつながることが出来て、私自身も刺激を受けました!



GROUP6

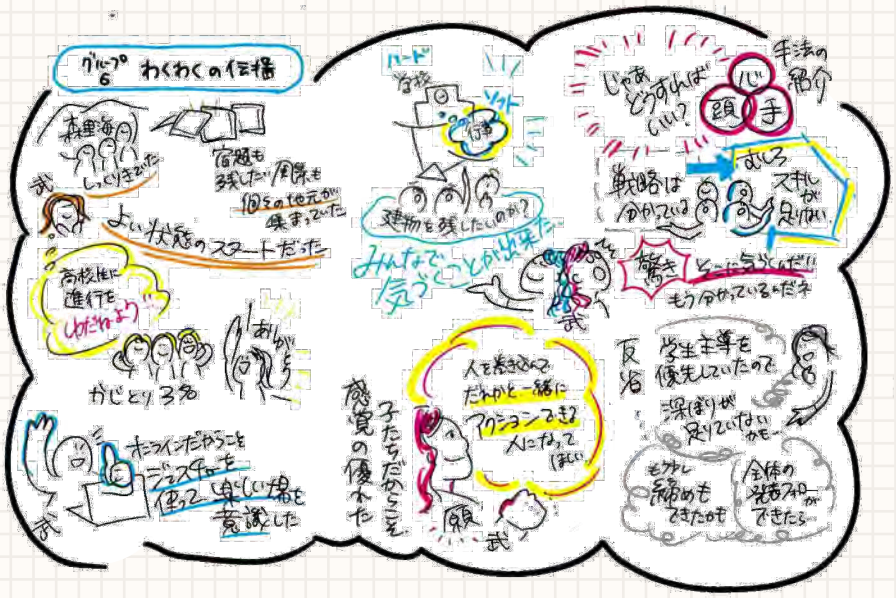


FA 武田裕希子

Slack を通して、それぞれの住む町や好きな事、想いを事前に共有できていました。大変恵まれたメンバーでした。生徒たちの自主性を尊重したいという想いが実現した半面、もっと深掘りできたなあという反省もありました。

TA 井上悟

みんな初めましての段階で、Zoom 特有のテンポのずれもあるなか、工夫しながら非常に高校生らしい白熱した議論が生まれていました。きらきらした目で、対面でまた話したいと言っているのを見て、それだけでやった意味があったと感じました。



参加者アンケート

参加してくれた高校生と高校の先生に聞きました

Q.森里海 byONLINE に参加してどうだった?

人と自然の関わり方の再認識

今住んでいる世界の景色を今後も残していくためには、人と自然がどのように関わっているかを再認識し、今後の人と自然のありかたを考えていかなければならないと感じました。そして、様々な意見や講義の内容を聴いて、環境の課題の解決がより身近なものに感じました。課題解決に向けて、自分でできる活動もたくさんあると思うので、これからはそういう活動もやっていけたらいいなと思いました。これからも自然に触れる機会はたくさんあると思うので、今回学んだ森里海連環学の知識をそういった場面で生かせたらいいなと思いました。

地域問題にも応用できる考え方

ほとんどの人が海や山の自然が豊かな景色について守りたい景色として考えているんだなと思いました。それぞれの地域の特徴のある祭りや伝統や特産品などを使ってその地域をアピールする方法も活性化や過疎を食い止めるにはいいと思いましたが、心理学を用いた、どんな景色を人は守りたいと感じるのかという人の感情を分析した発表が特によかったなと感じました。感じ方の分析というのが斬新な切り口で、他の地域問題にも応用して解決案を考え出すことができそうだと感じました。地域問題に興味があったので学びの多い時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

全て人間次第無責任ではいけない

同じ世代の高校生との交流の中でそれぞれが住んでいる環境も違い、そこにある問題点が違う中で、どうやって解決していかなければならないのかを一緒に考えることができました。それぞれが持ってきた写真がすべて自然の写真で、この風景を残していくには自然に頼るのではなく、人間たちが支えていかなくてはならないと感じました。この機会があったおかげで環境を悪くしているのも、守っていくのもすべて人間が関わっていることだと思い、無責任ではいけないことに改めて気づかされました。

多様な価値観 話し合いが面白い！

人と意識的に交流する機会になってみると、やはり人間の価値観が多様であることがよくわかるなと思った。たくさんの考え方があり、とても話し合いが面白く感じました。どのようにそれらの価値観を受容したり、捉えるかについて考える、良い場になったなと思いました。

広い視野を持てた

自然環境について考えるために一つの自然に着目するだけではなく、他の自然や里と言った人によって作られた場所との関係を意識することで自然の保護や在り方の考えに新しい可能性が出来たので、更に広い視野で自然の為に出来ることを取り組みたい。

大変有意義なオンラインイベント

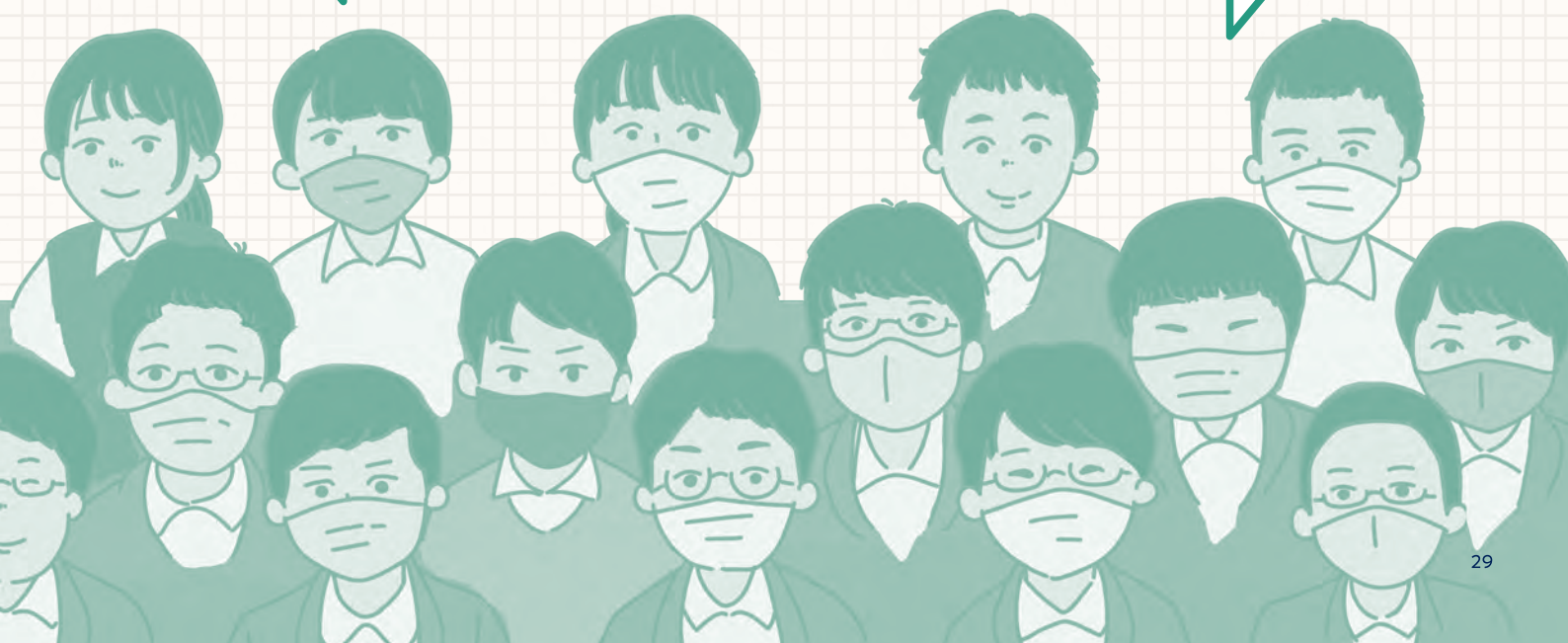
日本各地にいる高校生と環境について話し合い、最後にグループ発表をする、という貴重な体験ができたと感じている。また、コロナ禍でなければ、ぜひ現地へ行き、交流したかったと思えるほど、大変有意義なオンラインイベントであったと感じた。

FA さんの存在

ファシリテーターの先生方の声かけ（発問の仕方）がとても参考になりました。生徒の皆さんの考えや意見をスムーズに引き出し、整理されていて感動しました。私たち高校職員もティーチングだけでなくコーチングするように意識しないといけないと感じました。

実はつながっていた問題に気づいた

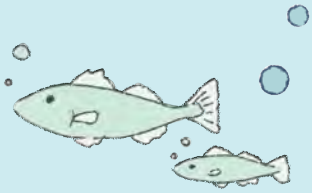
他校の方との交流によってそれぞれさまざまな問題を抱えていて、それらは一見バラバラに見えたけど実は繋がっているものがいっぱいありました。自分では思いつかないような意見等がいっぱいあり、とても良い機会になったので参加できてよかったです。



特別講演「川と海の健全なつながりを支えるスズキの生態」

山下 洋　森里海連環学教育研究ユニット研究員・京都大学名誉教授

川と海を行き来するスズキの話について、山下名誉教授よりご講演いただきました。海の生き物だと思われがちなスズキですが、川の資源を支える需要な役割を果たしていました。



最後に

住む場所や年代を超えて最後まで熱く議論していて、聞いていてとても迫力がありました。私も森里海連環学というものを始めてまだ間もないですが、人と人が繋がることにより、社会の色々なことが解決に向かうと信じています。ですので、こう言ったシンポジウムの形でみなさんとの交流を続けさせていただき、自分でも考えていけたら良いと思います。また、例年 3 月におこなっているポスターセッションの WS も開催したいと思っています。ぜひ参加してください。高校の先生方、FA の先生方もご尽力いただきましてありがとうございます。今回、このコロナ禍であってもこのように開催できましたこと、重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

京都大学フィールド科学
教育研究センター・センター長 教授
徳地　直子

登壇者

基調講演	Panasonic	中田　公明
	京都芸術大学副学長	吉川　左紀子
ファシリテータ	京都大学フィールド研特定助教	赤石　大輔
	京都大学野生動物研究センター特定助教	福島　誠子
	京都大学地球環境学堂研究員	時任　美乃理
	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター研究員	法理　樹里
	神戸大学農学研究科特命准教授	清水　夏樹
	京都大学地球環境学舎	武田　裕希子
	環境教育論　修士２年	
TA	農学部森林科学科　１回生	佐山　葉
	農学部資源生物科学科　１回生	山本　玲
	農学部森林科学科　１回生	佐藤　薫
	農学部森林科学科　３回生	上田　奈央
	農学部森林科学科　３回生	奥野　真木保
	農学研究科森林科学専攻　修士２年	井上　悟
グラフィックファシリテーター		有賀　優

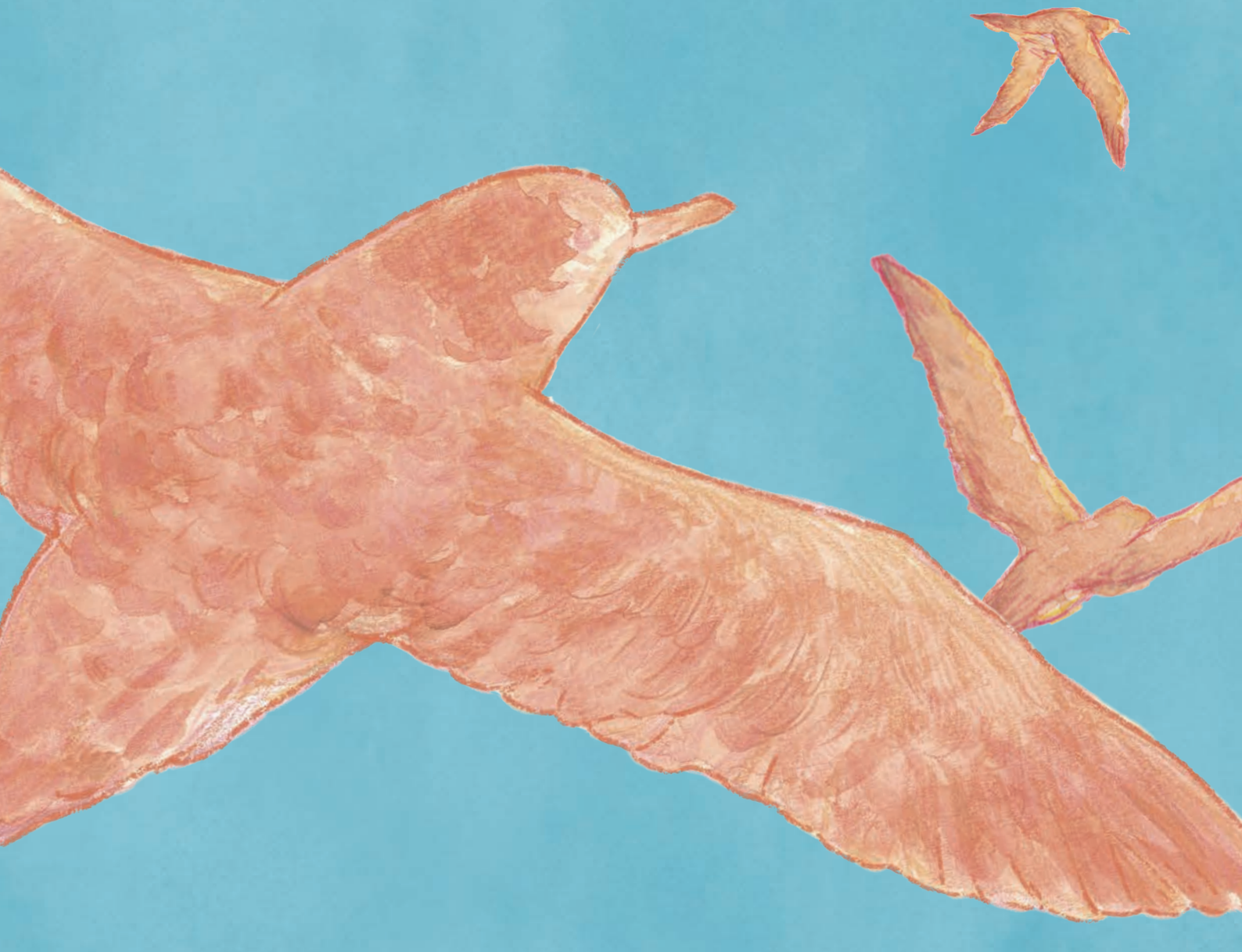
スタッフ

森里海連環学教育研究ユニット	研究員・京都大学名誉教授	山下　洋
	研究員・京都大学名誉教授	吉川　左紀子
	特定研究員	アンドレア　フローレス　ウルシマ（Andrea Flores Urushima）
	特定研究員	西本　希呼
	特定職員	髙見　純子
	事務補佐員	野村　眞由美
	事務補佐員	濵田　綾香
	事務補佐員	美田　真知子
フィールド研	センター長・教授	徳地　直子
企画情報室	技術職員	槇田　盤
	技術職員	中村　はる奈

冊子デザイン

編集	京都芸術大学芸術学部 情報デザイン学科４回生	楠本　祥子
レイアウト	京都芸術大学芸術学部 情報デザイン学科４回生	澁谷　敦志
イラスト	京都芸術大学芸術学部 情報デザイン学科３回生	河﨑　大輝

京大 森里海ラボ by ONLINE
ビジュアルブック
2021 年 1 月　発行
印刷・製本　　株式会社グラフィック

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

KYOTO UNIVERSITY
KYOTO JAPAN
FOUNDED 1897